

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：44432

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04299

研究課題名（和文）非行少年の社会復帰を目的とした表情認知能力の特性の分析と訓練プログラムの開発

研究課題名（英文）Analysis of the characteristics of facial expression recognition skills and development of a training program for juvenile delinquents for the purpose of their reintegration into society

研究代表者

西木 貴美子 (Nishiki, Kimiko)

東大阪大学短期大学部・その他部局等・准教授

研究者番号：80634302

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、少年院在院者は、悲しみ、恐怖、嫌悪、驚きの表情において正答率が低く、提示写真の性別によって表情認知に違いがあることが示唆された。また、少年院在院者は、悲しみを嫌悪に、嫌悪を悲しみと怒りに、恐怖については悲しみ、怒り、驚きに誤選択しやすく、その中でも悲しみについては男性写真に対して誤選択を起こしやすいことが明らかとなった。表情認知トレーニングを実施した対象者は、表情認知課題の成績が有意に上がる結果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、少年院在院者の表情認知に関する問題が調査によって客観的に示されたとともに、男性写真と女性写真を用いることで表情表出者の性別による表情認知の違いについて確認することができた。少年院在院者の対人関係の問題の要因の一つに、他者の表情を誤って読み取ってしまうというプロセスがある可能性が示唆された。また、表情認知課題の正答率が低い表情について表情認知トレーニングを行うことで、表情認知課題の正答率が向上し、1か月後もそれが維持できていることが確認できた。表情認知トレーニングは少年院在院者の適切な表情認知に寄与し、彼らの表情理解促進に適用できる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：In the present study, juvenile inmates gave lower percentages of correct responses for sadness, fear, disgust, and surprise, suggesting that there are differences in facial expression recognition depending on the gender of the presented photograph. In addition, juvenile inmates were more likely to misselect sadness for disgust, disgust for sadness and anger, and fear for sadness, anger, and surprise, and among these, were more likely to misselect sadness for male subjects. Subjects who received the facial expression recognition task training showed a significant increase in performance on the facial expression recognition task.

研究分野：臨床心理学

キーワード：表情認知 少年院 非行少年

1. 研究開始当初の背景

他者との円滑なコミュニケーションを図り社会に適応していくには、社会的ルールを実行する行動や認知の育成だけでなく、自他の感情の管理、理解、利用、知覚等、感情面の育成の必要性が指摘されている(渡辺, 2011)。ソーシャルスキルトレーニングの中では、言語的なコミュニケーションスキルだけではなく、非言語的なコミュニケーションスキルについても指導されている場合もある。ただし、このような場合であっても、対象者である非行少年が非言語的な情報のやりとりについて基本的なスキルを有しているかどうかの評価は十分になされていない。言語的スキルと異なり、非言語的なスキルに関しては家庭教育や学校教育で積極的に指導・評価される機会はほとんどない。

日常生活では相手から「何を言われたのか」だけではなく、その表情から相手の感情や意図を理解することがコミュニケーションを行う上で非常に重要である。非行少年は、これらの表情認知に課題を抱えていることを示す報告がある(Carr & Lutjemeier, 2005; 佐藤・魚野・松浦・十一, 2008)。非行少年の円滑な社会復帰のためには、他者の意図や心情を推察する力の育成が重要な課題である。

2. 研究の目的

本研究では、犯罪的傾向の進んだ非行少年を対象に Ekman and Friesen (1975) が提唱する人の基本感情である「幸福、悲しみ、怒り、嫌悪、恐怖、驚き」の6感情の表情について、日本人の写真を使用した表情認知課題を作成し、少年院在院者を対象に表情認知課題を実施し、表情別の認知の正確性、他表情への誤認傾向を一般少年と比較検討を行い、少年院在院者の表情認知の特性を明らかにし、表情認知に課題がある者を対象とする表情認知能力の向上を目的とした表情認知トレーニングを作成し、その効果について検証を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 人の基本6表情(幸福、悲しみ、怒り、恐怖、嫌悪、驚き)についての表情認知課題を作成し、少年院在院者を対象に表情認知課題を実施し、表情別の認知の正確性、他表情への誤認傾向を一般少年と比較検討を行う。

(2) 写真を用いた表情認知トレーニングと動画を用いた表情認知トレーニングを作成し、少年院在院者を対象に実施し、効果の検証を行う。

4. 研究成果

(1) 少年院在院者の表情認知について

表情認知課題の正答率分析から、悲しみ、恐怖、嫌悪、驚きの表情において大学生群よりも少年院群で正答率が有意に低いことが認められた(図1)。提示写真の性別の違いに関しては、少年院群においてのみ喜びと嫌悪表情で差が認められた。とりわけ、少年院群で正答率の低かった嫌悪表情に関しては、女性写真より男性写真に対する正答率が有意に低く、提示写真の性別によって表情認知に違いがあることが示唆された。誤選択率の分析から、少年院群では大学生群よりも悲しみを嫌悪に、嫌悪を悲しみと怒りに誤選択しやすいことが明らかとなった。さらに、恐怖については悲しみ、怒り、驚きに誤選択しやすいが、その中でも悲しみについては男性写真に対して誤選択を起こしやすいことが明らかとなった。

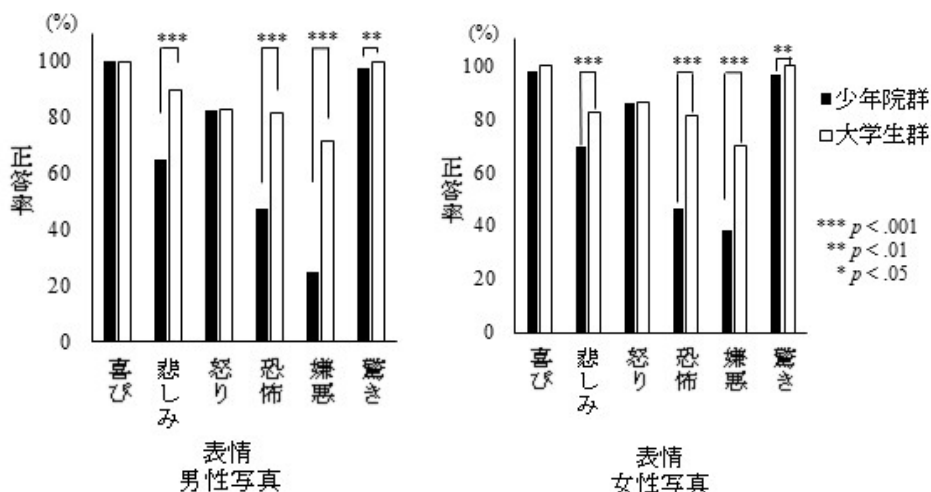


図1 各表情の正答率

(2) 写真を用いた表情認知トレーニングの効果について

表情認知トレーニングの実施に先立ち、プレテストを行った。その後表情認知トレーニングを実施し、トレーニング終了1週間後にポストテストを行い、効果測定を行った。また、表情認知トレーニング終了1か月後に調査可能であった者には、フォローアップテストを行った。その結果、男性写真、女性写真のいずれにおいてもプレ・ポストテストの正答率で有意差が認められ、プレテストよりポストテストにおいて、男性写真、女性写真ともに有意に高い正答率となった(図2)。男性写真では悲しみ、恐怖、嫌悪の3表情について、女性写真では悲しみ、怒り、恐怖、嫌悪の4表情について有意に高い正答率となった。プレ・ポスト・フォローアップテストの結果は、男性写真、女性写真ともにポストテストとフォローアップテストの正答率がプレテストの正答率を有意に上回り、プレテストの正答率よりもポストテスト正答率は高く、フォローアップテストでもその高さは維持されていると判断できた。表情別プレ・ポスト・フォローアップテストでは、男性の恐怖表情、女性の悲しみ、恐怖、嫌悪表情において有意差が認められた。

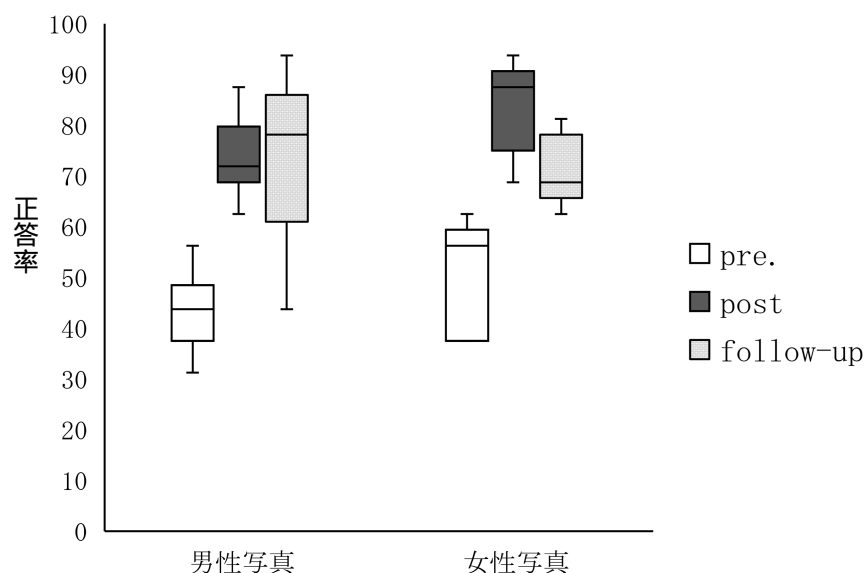


図2 プレ・ポスト・フォローアップテスト正答率の変化

(3) 動画を用いた表情認知トレーニングについて

少年院在院者で表情認知課題の成績が低い少年を対象に動画を用いた表情認知トレーニングを実施した。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大により少年院での実施が短期間となったため、得られたデータは少数であった。今後も継続的に実施予定である。

<引用文献>

- Carr, M. B., & Lutchmeier, J. A. (2005) The relation of facial affect recognition and empathy to delinquency in youth offenders. *Adolescence*, 40 (159), 601-619.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975) *Unmasking the Face: guide to recognizing emotions from facial clues*, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, N. J.
- 工藤力訳編 (2013) *表情分析入門 表情に隠された意味をさぐる*. 誠信書房.
- 佐藤弥・魚野翔太・松浦直己・十一元三 (2008) 非行少年における表情認識の問題. *電子情報通信学会技術研究報告: 信学技報*, 108 (238), 1-6.
- 渡辺弥生 (2011) *子どもの感情表現ワークブック*. 明石書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 西木貴美子 塩川宏郷	4. 巻 42
2. 論文標題 非行少年の表情認知研究の現状と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 障害科学研究	6. 最初と最後の頁 237-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20847/adsj.42.1_237	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西木貴美子 岡崎慎治	4. 巻 60(1)
2. 論文標題 少年院在院者の表情認知特性に関する実験的検討—大学生との表情認知課題成績の比較から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 特殊教育学研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西木貴美子・岡崎慎治
2. 発表標題 少年院在院者を対象とした表情認知訓練による表情理解促進に関する予備的検討
3. 学会等名 日本小児精神神経学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西木貴美子 塩川宏郷
2. 発表標題 少年院在院者の表情認知に関する研究
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第56回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岡崎 慎治 (Okazaki Shinnji)		
連携研究者	塩川 宏郷 (Shiokawa Hirosato) (10306110)	筑波大学・人間系・准教授 (12102)	
連携研究者	津田 芳見 (Tsuda Yoshimi) (30380132)	鳴門教育大学・特別支援教育専攻・教授 (16102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------